

「笛吹けど踊らず」

ルカの福音書 7:27~35

はじめに

ルカの福音書【新改訳 2017】

7:27 この人こそ、『見よ、わたしはわたしの使いをあなたの前に遣わす。彼は、あなたの前にあなたの道を備える』と書かれているその人です。

7:28 わたしはあなたがたに言います。女から生まれた者の中で、ヨハネよりも偉大な者はだれもいません。しかし、神の国で一番小さい者でさえ、彼より偉大です。

前回、「声」という意味のヘブル語コール(קול)と、「群れ、集会、教会」という意味のカーハール(קהל)という二つの言葉の関連性から、このバプテスマのヨハネについて、このように述べました。彼は「おいでになる方」やがて来られる御方である主イエシュアの、その「道を備える」者、すなわちイエシュアの来臨、再臨を知らせる「声」コール(קול)であると。そしてヘブル語でカーハール(קהל)と呼ばれる私たち「教会」は、今日における彼の働きを担うべく、イスラエルの父祖アブラム(אַבְרָם)がアブラハム(אַבְרָהָם)となったように、神に



召された、選ばれた存在であると述べました。イエシュアはこのヨハネを指して、彼を人の中で最も「偉大な者」と呼ばれました。それはイエシュアがこの地上に「おいでになる」来られるということがいかに重要なことであるかということ、主イエシュアの来臨こそが最も重要な事実、真実であるということを示しています。今日における私たち教会は、このイエシュアの再び来られること、再臨を宣べ伝えることができる地上で唯一の存在なのです。ですからそのような教会に対してイエシュアはヨハネと同じような評価をもって見てくださいます。私たちはイエシュアの再臨についてこれからもひたすらに、その「大路をまっすぐに (イザヤ 40:3)」宣べ伝え続けなければなりません。しかしヨハネが自分を「荒野で叫ぶ者の『声』 (ヨハネ 1:23)」とたとえたように、その声、その言葉は、家や街などの人が生きる場所や環境に則した、調和するものではありません。それはつまり人の考えや生き方に寄り添うものではなく、まさに街と荒野のように、むしろそれに逆行するものであり、人にとって受け入れがたいもの、理解することも信じることも難しいものであることが示されています。そしてそれこそが神の御言葉、ヘブル語のダーヴァール(דְּבַר)であり、「荒野」ミドゥバール(מִדְבָּר)にはそのような神の御言葉のある場所、御言葉によって生きるという意味が秘められているのです。今日の箇所にはそのような神の御言葉、ここでは「教え」と訳される神のご計画を信じ受け入れることができないこの時代、この世の人々についてイエシュアが語られたものです。それでは今日の箇所を見てまいりましょう。

1. バプテスマ

ルカの福音書【新改訳 2017】

7:29 ヨハネの教えを聞いた民はみな、取税人たちでさえ彼からバプテスマを受けて、神が正しいことを認めました。

7:30 ところが、パリサイ人たちや律法の専門家たちは、彼からバプテスマを受けず、自分たちに対する神のみこころを拒みました。

「バプテスマ」洗礼とも訳されるこの言葉、この行為はヘブル語の視点で捉えるならば、それはイエシュアの地上再臨を指し示すものであると前回も述べました。なぜなら「浸す、沈める」という意味のターヴァル(טָבַל)は本来、身体を水に浸すことではなく、衣を血に浸す、血に染まった服という意味の言葉だからです。

創世記【新改訳 2017】

37:31 彼らはヨセフの長服を取り、雄やぎを屠って、長服をその血に浸した。

このように、「バプテスマ」洗礼とも訳されるターヴァルは本来、血に染まった衣、長服を指し示す言葉なのです。ちなみにこの「長服」は本来、神である主が、最初の人アダムとその妻に着せられた皮の衣(創世記 3:21)を意味します。このような衣を血に染めて、深紅の衣を身にまとわれ、やがてイエシュアがこの地上に来られる、おいでになる、再臨されることが預言されています。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

19:11 また私は、天が開かれているのを見た。すると見よ、白い馬がいた。それに乗っている方は「確かだ真実な方」と呼ばれ、義をもってさばき、戦いをされる。

19:12 その目は燃える炎のようであり、その頭には多くの王冠があり、ご自分のほかはだれも知らない名が記されていた。

19:13 その方は血に染まった衣をまとい、その名は「神のことば」と呼ばれていた。

イザヤ書【新改訳 2017】

63:1 「エドムから来るこの方はだれだろう。ボツラから深紅の衣を着て来る方は。その装いには威光があり、大いなる力をもって進んで来る。」「わたしは正義をもって語り、救いをもたらす大いなる者。」

このように、神のご計画は人に水のバプテスマを受けさせることではありません。それはただの「型」にすぎないのです。しかもその解釈も今日、多くは誤解され、あるいは意味もよくわからないまま、ただの宗教的な儀式として行われています。何度も言いますが「バプテスマ」洗礼とは本来はターヴァルであり「血に染まった衣をまとい」「深紅の衣を着て来る方」、イスラエルのメシアであられるイエシュアの地上再臨の事実を指し示すものなのです。ですから「ヨハネの教えを聞いた民」とはこの神の教え、神のご計画を信じ、受け入れ、待ち望む者たちを指し示しているのです。このように、聖書の「教え」とはいわゆる一般的な概念の宗教とは大きく異なっています。それは私たちが何をなし、何をやめることを勧める、命じるものではなく、神であられる主のご計画であり、主が何を成し、何を成し遂げられるかということを知り、信じ、そのご計画の完成、成就を待ち望むこと、そしてそのおとずれ、到来を告げ知らせる、宣べ伝えることを指すのです。そしてその声、御言葉、教えを聞く者、信じる者は「みな、取税人たちでさえ」誰でも神の正しさを受け入れた者、義人とされ、やがてイエシュアがこの地上にお建てになる「神の

国」のその民として迎えられます。それは地上で最も偉大な者と呼ばれたヨハネよりもさらに偉大な存在であるとイエシュアは明言しておられます。

「ところが、パリサイ人たちや律法の専門家たちは、彼からバプテスマを受けず、自分たちに対する神のみこころを拒みました。」とあります。「パリサイ人」(פְּרִישִׁי)とは「明らかにする、解き明かす」という意味のパーラシュ(פָּרָשׁ)がその由来ですが、この言葉はパーラーシュ(פָּרָשׁ)とも読むことができ、その意味は「騎兵、軍馬、戦車」で、それは本来エジプトのファラオの軍馬、つまりイスラエルに敵対する異邦人の軍勢、勢力を指します(創世記 50:9)。さらにはペレシュ(פְּרִישׁ)とも読むことができ、その意味はなんと「汚物、糞」です。以下はその最初の言及です。

出エジプト記【新改訳 2017】

29:10 あなたは雄牛を会見の天幕の前に近づかせ、アロンとその子らはその雄牛の頭に手を置く。

29:11 あなたは会見の天幕の入り口で、【主】の前で、その雄牛を屠り、

29:13 その内臓をおおうすべての脂肪、肝臓の小葉、二つの腎臓とその上の脂肪を取り出し、これらを祭壇の上で焼いて煙にする。

29:14 その雄牛の肉と皮と汚物は宿営の外で火で焼く。これは罪のきよめのささげ物である。

このようにペレシュは本来、神にささげられる、受け入れられる祭壇のいけにえではなく、宿営の外で焼き捨てられる「汚物」を指すのです。このように「パリサイ人」という名には焼き滅ぼされる敵の軍勢すなわち、終わりの日にイスラエルに敵対する諸国の軍勢が、地上再臨されるイエシュアによって焼き滅ぼされることが指し示されているのです。そしてさらに「律法の専門家たち」と訳されるハハーミーム(חַחְמִיּוֹם)は本来、神の夢やまぼろしの意味を解き明かせない異邦人の知恵者たちを指す言葉です。

創世記【新改訳 2017】

41:5 彼はまた眠り、再び夢を見た…。

41:8 朝になって、ファラオは心が騒ぎ、人を遣わして、エジプトのすべての呪法師とすべての知恵のある者たちを呼び寄せた。ファラオは彼らに夢のことを話したが、解き明かすことのできる者はいなかった。

このように、エジプトの「すべての知恵のある者たち」「知恵のある、賢い」という意味のハハーミーム(חַחְמִיּוֹם)な者たち、すなわちハハーミームは夢を理解することができず、ただイスラエルの子ヨセフだけがその意味を解き明かしました。このようにヘブル語の視点で捉えるならば「パリサイ人」「律法の専門家たち」とはまさに「神のみこころを拒み」、理解せず、信じず、神に敵対する存在を指し示しており、そしてその末路はすべて外で焼き滅ぼされる、すなわちこの世の外にある、燃える火の池、ゲヘナに投げ込まれる、ということまでもが指し示されているのです。イエシュアが福音書の中で何度も何度もこの名をあげて「わざわざだ、偽善の律法学者、パリサイ人(マタイ 23:13~29)」と言っておられるのはまさにこの事実にあるのです。

2. 笛と弔いの歌

ルカの福音書【新改訳 2017】

7:31 それでは、この時代の人々を何にたとえたらよいでしょうか。彼らは何に似ているでしょうか。

7:32 広場に座り、互いに呼びかけながら、こう言っている子どもたちに似ています。『笛を吹いてあげたのに、君たちは踊らなかつた。吊いの歌を歌ってあげたのに、泣かなかつた。』

7:33 バプテスマのヨハネが来て、パンも食はず、ぶどう酒も飲まずにいと、あなたがたは『あれは悪霊につかわれている』と言い、

7:34 人の子が来て食べたり飲んだりしていると、『見ろ、大食いの大酒飲み、取税人や罪人の仲間だ』と言います。

イエシュアは「この時代の人々」つまり「パリサイ人」「律法の専門家たち」に象徴される「神のみこころを拒み」これを理解することも信じることもないすべての人を「広場に座」っている子どもにたとえられました。前回の箇所ではイエシュアは「荒野」に住んでいたヨハネを指し、その偉大さ、そして正しさを言い表されました。しかし「この時代の人々」はみな「広場に座」っていて、神の御言葉を聞く、受け取る場所としての「荒野」ミドゥバールには来ていない、神から遠く離れ、自分たちにとって都合の良いと感じている、人間中心、自己中心の象徴である街の「広場に座」っている子どもだと言われたのです。しかもこの子どもたちは親もいない、住む家もない孤児たちです。なぜなら「座る」という意味のヤーシャヴ(יָשָׁב)は本来、「住む」という意味の言葉だからです。そこに座っている、住んでいる限り、神の教え、神の御心、ご計画を聞いてもそれを理解することも信じることもできないのです。イエシュアはここで笛の音を聞くこと、吊いの歌を聞くことにたとえて神のご計画についての教えを聞くことを指していることは言うまでもありません。

ちなみに「笛を吹く」という意味のハーラル(לָלַח)は本来「始める」という意味の言葉で、それは「主の御名を呼ぶこと(創世記 4:26)」を指す言葉なのです。主の御名を呼ぶことの意味、目的は、主に来ていただくこと、主の来られること以外に何があるでしょう。このようにハーラルは主の来臨、主イエシュアの再臨を求めること、求める声を意味する言葉なのです。また同じように「笛を吹く」という意味でハーラルが使われている記述にこのようなものがあります。

I 列王記【新改訳 2017】

1:39 祭司ツアドクは天幕の中から油の角を取って来て、ソロモンに油を注いだ。彼らが角笛を吹き鳴らすと、民はみな、「ソロモン王、万歳」と言った。

1:40 民はみな、彼の後に従って上って来た。民が笛を吹き鳴らしながら、大いに喜んで歌ったので、地がその声で裂けた。

これはダビデの子ソロモンがイスラエルの王に即位、任命された時ものです。実はこの時、彼の兄アドニヤがその王位を狙っていました。しかしソロモンが主とイスラエルの民に選ばれて王となり、「民が笛を吹き鳴らしながら、大いに喜んで歌った」とあり、後にアドニヤは殺されました。このように、ハーラルはダビデの子が王となることを指し示す言葉でもあるのです。それはすなわち、終わりの日にダビデの子と呼ばれるイエシュアがイスラエルの王となり、アドニヤにたとえられた黙示録の獣、反キリストが滅ぼ

されるという事実を表しており、イエシュアはこの事実を踏まえ、あえてハール「笛を吹いて…」というたとえを用いられたのです。これはヘブル語でなければ読み解けない事実です。

また「吊いの歌」のたとえについてですが、これは「哀歌」と訳されるキーナー(קִינָה)のことです。聖書で最初の哀歌は、いわゆる哀歌 1:1 からのもではありません。それは以下のものです。

Ⅱサムエル記【新改訳 2017】

1:17 ダビデは、サウルのため、その息子ヨナタンのために、次の哀歌を歌った。

1:18 これはユダの子らに弓を教えるためのもので、『ヤシャルの書』にまさしく記されている。

1:19 「イスラエルよ、君主はおまえの高き所で殺された。ああ、勇士たちは倒れた。

1:20 これをガテに告げるな。アシュケロンの通りに告げ知らせるな。ペリシテ人の娘らを喜ばせないために。無割礼の者の娘らが喜び躍ることがないために。

この聖書で最初の「哀歌」は、ダビデがサウルとヨナタンの死を悼んで歌ったものとなっていますが、それは「弓を教えるためのもの」であるとも記されています。しかし読めばわかるとおり、この歌は弓の打ち方や作り方などは全く関係がありません。この歌は王と王子の死という悲報を敵に知られてはならない、という状況にたとえられた、敵に聞かれたくない、知られたくない歌なのです。つまりこれはイスラエルの言葉、ヘブル語でなければ解けない暗号のような歌なのです。その内容について、聖書の外典「ヤシャルの書」についての説明はまた別の機会としますが、「弓」はヘブル語でケシェット(קֶשֶׁת)といい、これは「虹」とも訳されるもので、それは本来、神がノアと交わされた「契約」を意味する言葉なのです。

創世記【新改訳 2017】

9:13 わたしは雲の中に、わたしの虹を立てる。それが、わたしと地との間の契約のしるしである。

9:14 わたしが地の上に雲を起すとき、虹が雲の中に現れる。

9:15 そのとき、わたしは、わたしとあなたがたの間、すべての肉なる生き物との間の、わたしの契約を思い起こす。大水は、再び、すべての肉なるものを滅ぼす大洪水となることはない。

9:16 虹が雲の中にあるとき、わたしはそれを見て、神と、すべての生き物、地上のすべての肉なるものとの間の永遠の契約を思い起こそう。」

9:17 神はノアに仰せられた。「これが、わたしと、地上のすべての肉なるものとの間に、わたしが立てた契約のしるしである。」

結論から言ってこの「弓」とも訳される「虹」ケシェットとは再臨のイエシュアのことです。イエシュアは「雲の中に現れる」御方だからです。

詩篇 68:4【新改訳 2017】

神に向かって歌い御名をほめ歌え。雲に乗って来られる方のために道を備えよ。その御名は【主】。その御前で喜び躍れ。

と預言されているとおりです。またこの雲もただの雲ではなくイエシュアが率いられる天の御使い、聖徒たちの軍勢をたとえたものです（黙示録 19:14）。このように「哀歌」から「弓」から「虹」からそして「永遠の契約」と連想させて再臨のイエシュアを指し示すという非常に凝った技巧がイエシュアのたとえには施されており、これはまさに奥義、隠された宝と呼べるものです。

このように、「笛」と「吊いの歌」、どちらもイエシュアご自身を指し示しており、そしてそれは終わりの日のイエシュアの再臨、教会の携拳（Iテサロニケ 4:16~17）も含めた、「おいでになる方」イエシュアの来られることを表しているのです。

しかしながら、今の「この時代の人々」は、このイエシュアの再臨の事実を信じることができません。それどころか偽りの父と呼ばれる悪魔、サタンのもたらす偽りにより、神について、聖書について、イエシュアについて、そのご計画について、間違った考え、解釈、理解を持ってしまっているのです。このような社会の、人々の末路は先ほど述べた通りの滅びです。しかし「この時代の人々」はその滅びの事実をもまた信じられないのです。

3. 正しいこと

ルカの福音書【新改訳 2017】

7:35 しかし、知恵が正しいことは、すべての知恵の子らが証明します。」

この御言葉は、今日の箇所の最初の「7:29 ヨハネの教えを聞いた民はみな、取税人たちでさえ彼からバプテスマを受けて、神が正しいことを認めました。」の繰り返し、言い換えによる強調文です。つまり「すべての知恵の子ら」とは「ヨハネの教えを聞いた民」のことであり、「知恵が正しいこと」とは「神が正しいこと」と同義です。そしてそれは述べたように、イエシュアの再臨を知らせる「声」としての私たち「教会」の存在と目的を指し示しています。イエシュアは言われました。この時代の人々は、この世は、私たちの神の声を、御言葉を信じません。しかしそれでもイエシュアのおとずれを、おいでになる方の、神のご計画を語る、叫ぶ声として、偉大な者として私たち教会は選ばれました。ですからこのようにして今日も語っています。語り続けていきます。しかし私だけが語っているわけではありません。もちろん銘形先生もおられます。しかし、語る者はつねに聞く者によって語っているのです。私や先生が語るができる場所と、今日ここにいる、またリモートでつながっている、聞く一人ひとりがいるからこそ語れるのであって、語る者は聞く者に支えられて語っているのです。こうして教会は束ねられた、まさに集められた一つの声となって語っているのです。みなさん一人ひとりはその重要な働きの一部を担っています。今ここに必要のない人は一人もいません。そして何より助け主である聖霊が、聖書に隠された奥義としての神のご計画を解き明かしてくださることによって語り続けることができます。どうかこれからもますます聖霊が私たち教会を通して、天の父なる神の御心を、御子イエシュアによって成し遂げられるそのご計画を、その完成である「神の国」の福音を語り続けてくださいますように。アーメン